

# 安全目標における「社会」の位置付けに関する概念的検討

Embedding "society" into the nuclear safety goals

\*菅原 慎悦<sup>1</sup>

<sup>1</sup>関西大学

被ばくによる健康影響を軸とした安全目標では、原子力災害による様々な社会的影響を捉えきれていない。本研究では、「社会」を安全目標体系にどのような形で位置付けられるかについて、3つの選択肢を考察する。

**キーワード**：安全目標，社会的影響，リスク

## 1. 緒言

原子力災害は、放射線被ばくによる直接的健康影響には回収されない広範な影響をもたらす。原子力規制委員会は、土地汚染防止を企図して大規模放出に係る追加的目標を提案したが、被ばくによる健康リスク抑制を掲げる上位目標とは整合的でない。上位目標に「社会的混乱の防止」を明示すべきとの提案もあるが<sup>[1]</sup>、議論は成熟していない。本研究は、安全目標体系に「社会」を整合的に位置づけるための概念的検討を行う。

## 2. 人の健康を守るために社会を守る

人の健康が多くの社会的要因から影響を受けているとの認識は、国際的に確立されつつある。福島事故でも、避難・環境汚染・産業停止といった事故影響が、社会の分断や伝統・文化の喪失、生活習慣の変化、さらには風評被害や教育の変化等様々な仲介因子を経て、健康被害に結びつくことが指摘されている<sup>[2]</sup>。そのため社会的混乱の防止・緩和を目指すことは、究極的には人の健康を守ることにつながる。最上位目標における「放射線の有害な影響から人と環境を防護する」の「放射線の有害な影響から」という限定を外し、間接的な健康影響をも広く包含する形とすれば、社会的混乱の防止を目標の射程に含めることが可能となろう。

## 3. 社会はそれ自体として守る価値がある

人は社会的存在であり、他者との関係性なしには生きられない<sup>[3]</sup>。そのため、個人の健康影響には還元できない重要かつ独自の価値を社会が帯びていると考えれば、社会はそれ自体として守る価値があることになる。これは、近年の放射線防護における「環境の防護」への関心の高まりに類似している。この立場からすると、最上位目標に「人」・「環境」と並んで「社会」を明示することも一案である。

## 4. リスク評価から零れ落ちるものとしての「社会的影響」

原子力災害の多様で広範な影響と、リスク評価において考慮可能なものとのギャップに目を向ける。既存のリスク評価では捉えきれない影響を「社会的影響」として概念化し、上位目標に位置づける。「社会的影響」はその定義上、下位目標への展開が困難である。高信頼性組織研究における“chronic unease”に倣い<sup>[4]</sup>、定量化困難なものへの「気持ち悪さ」を、リスク評価から零れ落ちるものへの継続的な意識づけとして活用する。

## 5. 結語

本研究からは、「社会」をどのようなものと見るかによって、目標体系における位置づけや意義が異なることが示唆される。いずれも概念的検討に留まっており、より具体的・実践的な考察が今後の課題である。

## 参考文献

- [1] 山口彰・菅原慎悦・佐治悦郎，「安全目標」再考：我が国でのあり方を問う，日本原子力学会誌 62(3): 147-152, 2020.
- [2] 越智小枝，原発事故による健康影響，その全体像，日本リスク研究学会誌 29(1): 27-31, 2019.
- [3] Hilsen AI, And they shall be known by their deeds: Ethics and politics in action research, *Action Research* 4(1): 23-36, 2006.
- [4] Fruhen LS et al., Chronic unease for safety in managers: a conceptualisation, *Journal of Risk Research* 17(8): 969-979, 2014.

\*Shin-etsu Sugawara<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Kansai Univ.